

---

**貴方様に、愛と忠誠を。**

佳

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

貴方様に、愛と忠誠を。

### 【Nコード】

N8317M

### 【作者名】

佳

### 【あらすじ】

高校生の鷺ノ宮りんは、自分の好きな人の情報の提供を条件として、同じ高校のアイドル、櫻田悠の「下僕」となることに。「下僕」のりんに下された命令は、「ご主人様を楽しませること」。  
戸惑いながらも、命令遂行のために努力する彼女だが。

全ては、ここから。

神様、お願いします。

もし、願いを叶えてくれるなら、どうぞ、どうぞ。

あの人と別れられますように。

貴方様に、絶対の愛と忠誠を

朝7時45分。

玄関先では、我が家の毎日の恒例行事がある。

それは、母の持ち物チェックだ。

「ハンカチ持った？」

「うん」

「ティッシュは？」

「持った」

「携帯は？」

「入れた」

「あ、そうだ」

母は何かを思い出したのか、その表情が変わっていく。

それは、そう、小言を言う時見せる眉間のしわが、母の感情を教えてくれる。

「昨日、携帯電話の明細が来ていたけど、ちょっと今月、使いすぎじゃない？」

「いくらだった？」

「1万円」

「朋子もそれぐらいって、言ってたよ」

母の顔は、ますます怒りの表情へと変わっていく。

「人の家は人の家。電話代とか、凄く高くてびっくりしたわ。どうにかしないと駄目よ」

母も私も、携帯の料金の仕組みが分かっていない。

日本に帰ってきて、2年目だというのに、日本の携帯の料金制度は難しすぎる。

「今度1万円だったら、自分で払ってね」

「えー!？」

「言っただでしょ？お父さんはあと30年ローンを払っていかなくてはならない身だし、  
あなたも高校生になったのだから、アルバイトして、自分のお小遣いを自分で稼いだら？」

我が家の権力者の発言に、抵抗できるだけの力は、私にはまだない。

「・・・はいはい。じゃあ、行ってきます」

私は母の小言から逃れるように、そのまま門を開け、学校への道を走った。

夏の朝は好きだ。

暑いけど、どこか清々しくて。

真っ青な空に浮かぶ白い雲のコントラストが絶妙で、

今日一日頑張ろう、という気にさせてくれる。

「りん！おはよ」

「あ、おはよ！」

背後から親友の朋子の声がした。

「今日の宿題やった？」

「うん、一応ね」

「お願い、後で写させて」

ここ私立風涼高校で、私は最初の夏を迎えようとしていた。

朋子は私の親友で、小学校から一緒の、いわゆる幼馴染だ。

明るくてちょっとお節介だけど、気の置けない、私の大切な友人である。

「もう。ちゃんと自分でやらなきゃ駄目だよ」

しかし、勉強はあまり好きではないようで、テスト前以外に勉強する姿を見たことは無い。



もつとも、要領は良いようで、だからこそ、風涼高校に一緒に入学できたのだろうけど。

「そうそう。夏休み、バイトをやるうかと思っているんだよね」

「私も今、お母さんにバイトしろって言われているの」

「本当に？じゃあ、今度一緒に求人誌見てみよう」

朋子と喋っていると楽しい。

どんな事だつて、面白いものに見えてくる。

「・・・あ、ちょっと、ちょっと、りん。見て」

朋子が指差す方には、女子生徒たちの群れができていた。

中には豪勢に飾りつけたうちわを持っている人もいる。

そこは学校の門の近く。

中にはうちの高校以外の女子生徒も混ざっているようだ。

「まあ、今朝もリッチにベントツで送迎ですか。良い身分なこと」

朋子が皮肉交じりに呟いた相手。

「きゃー！！悠君よ！」

「おはようございます！！悠君！！ああ、今日も変わらずに素敵・  
」

黄色い歓声やため息で包まれる中、一人の男子生徒が黒いベントツから出てきた。

歓声はその大きさを増し、興奮が一気に上昇していく。

「おはよう。みんな朝からわざわざ会いに来てくれてありがとう」

中心で爽やかな笑顔を振りまいている男子生徒。

名前は、確か、・・・櫻田悠と言ったはず。

風涼高校で、彼を知らない人間は恐らくいない。

あまり人の名前や顔を覚えられない私ですら、彼の事は一応知っている。

「ねえ、この前ね、悠君のCDにサインしてもらったんだー」

「私なんてね、舞台公演のパンフレットにサインしてもらったんだから。しかも名前入り」

「ずるいー！1日でも良い、下僕でも良い、一緒に居られないかな  
」

（下僕として？そんなの嫌じゃないかなあ）

聞こえた話に疑問を覚えつつも、その場を通り過ぎていく。

通りすぎる女の子たちも、櫻田悠の話ばかり。

そういえば、街中のポスターでも、彼に似た、いや、正確には彼本人のポスターをよく見かける。

「・・・朝からすげえな」

テンション低めの声で後ろから声をかけられた。

とき、と心臓が一瞬だけ高鳴る。

毎朝、いつ彼の声が聞けるのか、それが楽しみでしかたない。

「あ、恭一君。おはよう」

振り向くとそこには、少し色黒の、背の高い男の子が一人。

「おはよ」

中学時代同じクラスメイトで、Cクラスにいる島田恭一君だった。

眠たそうな目だったが、どうやら女の子たちの歓声で目が覚めたのだろう。

あくびをしながらいつの間にか私たちの後ろに立って、大きな人だかりの方を見ていた。

「相変わらずご苦勞なことだな、櫻田も朝から大變だろうに」

「そうでもないでしょう。あんなに嬉しそうに笑っちゃって」

朋子が皮肉を込めるように言う。

言われる通り、櫻田君の笑顔はすごい。

爽やかそのもので、見ているだけで女子のハートを鷲掴みにする・  
・らしい。

まるでメドゥーサに囚われた者達のように、周囲の女子たちは櫻田君の笑顔にくぎ付けになっている。

「あはは。でも、凄いいねえ、あんなに人がたくさん来るなんて」

いつの間にか私の隣に立っていた恭一君は、櫻田君の方を眺めてあくびをしていた。

「・・・まあ、アイドルだからな」

「私はああいうの、好きじゃない。アイドルってだけでちやほやされちゃって」

朋子がぷい、とそっぽを向いた。

櫻田悠。

今、日本の芸能界でトップを走る人気アイドルらしい。

さらさらと流れるような黒髪、

白い肌、

ぱっちりした目、

長いまつげ、

少し彫が深いけど、甘いマスクをしている。

声は高すぎることもなく、低すぎることもなく、丁度良い音程で、とても柔らかく優しい。

クラスのファンの子が、休み時間にそう話してくれたことを思い出す。

C/Dデビューにドラマに映画に引っ張りだこ・・・だそう。

しかも噂によれば、授業もきちんと出席しているらしく、試験の成績も悪くないらしい。

更に、スポーツもできるらしく、

体育祭や球技大会ではいつもエースとして出場する。

要は、容姿端麗、頭脳明晰、スポーツ万能。

それに加えてトップアイドル。

恐らくうちの学校の女子の8割が、彼のファンクラブのメンバーである。

「こんなものじゃないだろう。本来のあいつの人気なら。あれでも相当撒いて学校に来ているらしいって本人が言っていたな」

「まあ、りんはテレビ見ないからね、あまり知らないんでしょう?」

「え、まあ、えへへ」

実は私ぐらいだった。

この高校に入るまで、彼を知らなかったのは。

「そついや、りんって帰国子女だったよな?」

「そうだよ。小学校の3年から中学2年の途中までアメリカにいたんだよ。前も言ってるでしょ」



朋子が恭一君に代弁してくれた。

そつ、私はいわゆる帰国子女である。

父の仕事の関係で、アメリカで5年近くを過ごした。

インターネットが普及した現代でも、アメリカで暮らしていると、やはり日本の芸能情報には疎くなってしまう。

大きなニュースは、親が日本の新聞を持っていたり、インターネットですぐ見たりできるから分かるけど、わざわざ芸能情報までは見ない。

アメリカにいれば、むしろアメリカの芸能情報の方に興味を持っていないと、友達についていけない。

「・・・ま、俺もあんまり興味ないけどねえ」

「へえ、その割には櫻田君と仲良いらしいじゃん？恭一」

朋子と恭一君は仲が良い。

中学校ですつと同じクラスだったらしく、

私が帰国した時、朋子と一緒に私を迎え入れてくれた一人だった。

いじめられたらどうしよう、と心配していたが、朋子と恭一君がいてくれたから、私はクラスに直ぐになじめることができた。

だから、2人は私にとって本当にかげがえのない存在で、

こうやって同じ高校に通えるのはすごく嬉しかった。

「あ？だって同じクラスだし、席も隣だし、そんなのは当たり前だろう？」

それに、あいつ性格は悪くないし。普通に良い奴だよ」

ということとは、容姿端麗、頭脳明晰、スポーツ万能、おまけに性格も良い。

どうりで女の子たちが騒ぐ訳である。

「へえ……。有名人の割には性格が悪くないって、珍しいんじゃない？」

「まあな。忙しいはずなのに、毎日学校来て、ちゃんと宿題もやっていて、試験も成績は上位に食い込んでいるし。しかも周囲には気を配れるし。男だって嫉妬なんかできる余裕ないよ。どんだけ完璧なんだよって思うけど」

「ま、恭一とは雲泥の差よね」

朋子がにやり、と笑う。

「おい、お前、今の何だよ」

朋子が舌を出しているのに対して、恭一君が片手で殴るようなそぶりをする。

それは私にとって、2人がじゃれ合っているように見えた。

ずき、と胸の奥が痛い。

ずっと前からそうだったはずなのに。

どうしてだろう。

最近、何故か、そんな2人を見ると、心がざわつく。

2人が仲よく話していたり、じゃれあっていたりするのを見ていると、

何となく胸がつかえるような感じを、私は覚えていた。

ずきずきずき、と痛みが止まらない。

仲良いのは昔からで当たり前なことなのに、

何だかそれが、どうしようもなく、面白くなく感じてしまっていた。

そついう風に思う自分が、これまた嫌で仕方ないのに。

「ね、りん」

「・・・え？あ、ごめん、何？」

「何ぼーっとしているのよ。今日のお昼も、恭一の教室で食べようって言ったの」

「あ、うん。そうしよう」

2人は既に私より少し前を歩いていて、朋子が私に向かって手招きをしていた。

私は急いで2人の後を追う。

「さてさて。裏門から参りますか」

櫻田悠が登校してくる時間は、決まって正門が異常に混雑する。

これを潜って校内に入ろうとするのは至難の技だろう。

私たちは少し遠回りして、裏門へと向かった。



## 全ては、ここから。(2)

12時30分。

全校生徒が待ちかねたチャイムの音が鳴り響くと、一斉に校内は騒がしくなる。

「りん、行くよ」

お弁当を持った彼女が、私の所までやってきた。

「うん、あ、ちょっと待ってね」

私はどうやら他人と比べて少し行動が遅い。

だから、いつもぐずついてしまって、よく他人を怒らせてしまう。

朋子もよく私がぐずつくと愚痴を言うが、幼稚園のころからの付き合いだからだろう、

その文句には悪意は見られなかった。

「よし、じゃ、行こう」

私たちはAクラスの教室を出て、Cクラスへと向かった。

「遅えよ」

Cクラスの教室に入ると、既に恭一君は焼きそばパンをたいらげていた。

最近、3人で恭一のクラスで昼ごはんを食べることが増えた。

おかげでCクラスにも知り合いが増えて、それなりに楽しい。

「はあー。これだから野蛮人は」

朋子がわざとらしく肩をすくめて大きくため息をついた。

「何だよ、その野蛮人って」

2人のいがみ合う様子を見て、周囲のクラスメイトがからかってくる。

「あれ？島田、なにまたハーレム作っちゃっているのかなあ？」

「は？これがハーレムなんて笑わせるなよ」

周囲の男子生徒と恭一君がけらけらと笑い合っている。

別に冗談だってわかっているのに・・・。



感情は、面倒くさいくらいに、敏感に反応する。

「ねえ、島田」

突然、私の背後から声が聞こえた。

少し驚いて後ろを振り向くと、私より30センチはあるのだろうか、見上げるくらいの背の高い人がいた。

（・・・綺麗な顔だなあ）

至近距離で見るそれは、まるでどこかの絵画から抜け出てきたようだ。

さらさらの黒い髪に、

白い肌、

長いまつげ。

高い鼻に、大きくて澄んだ瞳。

美男子、という言葉がこれほどまでに似合う男性を、私は見たことが無い。

こんな人、Cクラスにいたのか。

でも、どうして今まで気がつかなかったのだろう。

「どうした？」

「僕、ちょっと屋上で昼寝しているから、もし授業5分前まで帰ってこなかったら、僕に電話かけてもらっても良いかな？」

耳に心地良い声。

聞き惚れてしまいそうになる。

「ああ。別にかまわないぜ」

「そっか。助かったよ。後で牛乳でも買ってやるから」

「はあ？それだけかよ」

「分かった、分かった。カレーパンとセットで手を打ってくれよ」

「しょうがねえな」

その人はにつこりと優しく微笑んで、私たちのそばを離れて行くこととしたが、その瞬間、彼の腕が私の肩にぶつかった。

「あ、ごめんね。大丈夫？」

彼がそっと私の肩に手を置く。

ふわ、と柑橘系の果物のような、甘酸っぱい香りが鼻をくすぐる。

男物の香水にしては甘いけど、きつ過ぎず、どこか爽やかな、良い香り。

「はい、平気ですよ」

その仕草に、少しどき、とした自分がいた。

「本当、ごめんね。それじゃあ」

そう彼は言っ、爽やかな笑顔で私に手を振ってくれた。

思わず手を振り返さないではられない。

「相変わらずの爽やかスマイルだね、櫻田君。ここで昼ごはん食べないの？」

「どうやら食欲より睡眠欲らしい。いつも昼休みになるとどっか行っちゃうよ。」

授業中も寝ているところ見ないから、どっかで軽く食べて済ませているんじゃないの？」

「はー。凄いな。さすがアイドルは違う。しかもさ、一人称は『僕』なんだ。『俺』とか『俺様』とか言っているのかと思っていたけど」

2人の会話に、私は驚いた。

「え？あれが櫻田君なの？」

「・・・え、知ってたんじゃないの？」

今度は2人が私の発言に驚いていた。

「・・・えっと。存在は知ってたけど、顔は近くで見たことなかったから」

実際私が知っている彼の顔は、高校入学当初、皆があまりにも噂するものだから、インターネットで調べた写真のものぐらいだった。

ブロマイドの写真で見た彼の顔より、さっき見た方が断然かっこいい。

というより、美しい、という言葉の方が適切に思える。

（うーん、皆がファンになるのも納得・・・かも）

あの時は、単純に「かっこいいなあ」と思ったぐらいだったけど。

「あはは。りんって本当面白いな」

大きくて角ばった手で、くしゃくしゃ、と恭一君に頭を撫でられた。

部活で焼けた肌に、白い歯が光る。

それを見て、とき、と心臓の鼓動が高鳴る。

同時に、胸の奥がとても温かい。

こうやって頭をぐしゃぐしゃって恭一君にされる時が、私にとってとても貴重な時だった。

だけど、ちょっと照れくさくて、

ぐしゃぐしゃにされたところをもつ一度自分の手でセットしなおしてしまふ。

「ま、とりあえずご飯食べよ」

朋子がいつの間にか櫻田君の机と椅子を恭一君の机にくつつけていた。

「りんは私と椅子、半分こでいいか」

「うん」

私たちは背をむきあって1つの椅子に座り合う。

「おい、それじゃあ狭いだろう」

そう言つて立ち上がると、恭一君が先生用のいすを持ってきた。

「ほれ、座りな」

私の隣に、その椅子を置いてくれた。

「あ、うん。ありがとう」

私はできるだけ笑顔で彼にお礼をする。

彼はただそれに頷くだけで、またもう一つのコロッケパンをむさばるように食べ始めた。

（ふふ、可愛いなあ）

恭一君の食べ方は中学時代から相変わらず。

それすら愛おしく思えてくる自分って、変なのかな。

「あ、それ上うまそうだな」

私のお弁当箱の中に入っていたコロッケが、恭一君に見つめられた。

大好きなクリームコロッケだったから、少し惜しいけど。

「食べる？」

「ちよつと恭一。りんのお弁当までねだるんじゃないわよ」

「朋子はうるさいなあ。りんが良いって言うてるから良いんだよ」

恭一君に食べてもらえるなら、私のクリームコロッケも本望というものだ。

・・・と思っているのもつかの間、恭一君の指が伸びてきて、

あつという間にそれが彼の口の中に放り投げられた。

「あー、おいしい！男爵も好きだけど、クリームコロッケも良いよな」

満足げな笑顔を浮かべる恭一君を見ているだけで、私の胃も幸せになれる気がする。

残りのおかずを食べながら、私たちはいつも通り、昼休みを堪能した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8317m/>

---

貴方様に、愛と忠誠を。

2010年10月10日00時29分発行